

〔総 説〕

保健・医療・福祉専門職を志す学生が アクティブラーニングで獲得するレリバンズ

岡 多枝子¹⁾, 三並 めぐる²⁾

¹⁾ 人間環境大学松山看護学部地域看護学領域

²⁾ 人間環境大学松山看護学部小児看護学領域

(依頼原稿)

【要旨】

今日、保健・医療・福祉専門職の質保証が課題となっている。また、世界的な教育改革の中でアクティブラーニング（active learning：以後、ALと略）が学校教育に導入されたが、その意義は十分に浸透しておらず、教育方法の模索も続いている。そこで本稿では、筆者らが進めてきた保健・医療・福祉専門職を志す学生がALで獲得するRelevance（目的と内容・結果の整合性、意義、関連性：以後、レリバンズと表記）に関する実証研究を総括した。その結果、①オリエンテーションとシラバスでシステム構築された『アカウンタビリティ（accountability:説明責任）によるオープニング』、②ALプログラムを学生と教師が創ることによる『ALでエンパワメント』、③地域の多様な価値の先へ『つながり・深まるクロージング』がレリバンズに寄与するとの知見を得た。今後、ALのプログラム開発と評価の構造化を進めるとともに、ティーチングポートフォリオ（teaching portfolio:教育達成記録）を用いた授業改善の継続が必要である。

キーワード：保健・医療・福祉専門職、アクティブラーニング、レリバンズ、レジリエンス、当事者性

I. 緒言

1. 保健・医療・福祉専門職の質保証

日本は急速な高齢社会の課題に対応できる保健・医療・福祉専門職の質保証が求められ、「地域包括ケア構想」では、医療・介護・予防・生活支援などの一体的提供が重要とされている（厚生労働省2013）。しかし、人口の都市化と少子化の影響により、子どもや若者が病者や生活困難を抱える人々に接する機会が減少し、対人支援専門職として必要な素養を醸成する教育方法の工夫が求められている。

おりしも、OECD（Organization for Economic Co-operation and Development:経済協力開発機構）のDeSeCo（Definition and Selection of Competencies:コンピテンシーの定義と選択）¹⁾が示すキー・コンピテンシー（主要能力）の定義²⁾がPISA（Program for International Student Assessment：国際的学習到達度調査）の概念に組み込まれるなど、グローバルな時代変動に対応した教育改革の世界的潮流が加速し、日本でも「人間力（内閣府2003）」や「就職基礎能力（厚生労働省2004）」、「社会人基礎力（経済産業省2006）」や「学士力（文部科学省2008）」など、新しい

¹⁾ 教育の成果と影響に関する情報への関心が高まり、「キー・コンピテンシー（主要能力）」の特定と分析に伴うコンセプトを各国共通にする必要性が強調。こうしたなか、OECDはプログラム「コンピテンシーの定義と選択」（DeSeCo）を1997年末にスタート（文部科学省HP）。

²⁾ キー・コンピテンシーとは、「日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、1. 人生の成功や社会の発展にとって有益、2. さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、3. 特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたもの、個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略」とされる（文部科学省HP）。

³⁾ 文部科学省HPや研究書の多くは、「アクティブ・ラーニング」と表記しているが、本稿では、「アクティブラーニング」とする。

⁴⁾ 中教審ではアクティブラーニングを、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」としている。（文部科学省HP）。

能力観への転換が提唱されてきた。

こうした中で、文部科学省中央教育審議会の「質的転換答申(2012)」や「論点整理(2015)」,「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ(2016)」において、アクティブラーニング³を導入する意義と重要性が提起され⁴,学校教育への導入が進められた。

2. アクティブラーニングを巡る議論と課題

ALは教授(teaching)から学習(learning)へのパラダイム転換であり(溝上2014),教師と学生,学生間の相互作用が成立条件とされ(Bonwell,C.・Eison,A.1998),ディープ・アクティブラーニング(松下,2015)の実相などが報告されている。筆者らはこれまで、看護師・保健師・養護教諭・高校福祉科教員などを志す学生(以後、学生)への教育や高大接続福祉教育において、主体的に課題に取り組み他者との対話や体験活動を通して考察を深めるALの導入による実践を行ってきた(三並ら,2010,岡ら,2006,2008,2010a,2010b,2010c,2010d,2010e,2011a,2011b,2011c,2014,2015a,2015b,2015c,2016a,2016b,2016c,2016d,2016e,2017,2018,2019)。しかし学校現場や研究分野においてALの意義は十分に浸透しておらず、教育方法の模索が続いている。

そこで本稿では、筆者らがこれまで進めてきた保健・医療・福祉専門職教育におけるALのレリバンスに関する実証研究を対象として、当事者である学生の視点から改めて検討・総括する。

II. 方法

1. 研究の方法

1) 研究対象

2017年4月から2019年7月にALを導入した科目「学校保健」,「健康相談活動論」,「社会保障論」,「社会福祉学」,「家族社会学」,「福祉科教育法」の授業内容とシラバス,学生の活動と成果物を研究対象とした。

2) KJ法(文化人類学者 Kawakita Jiroが考案した質的研究法:以下,KJ法と略)による質的研究

以下の手順で,KJ法(川喜田,1986)を参考とした質的研究を行った⁵。

(1)筆者らが行った授業(準備・展開・評価)と作成したシラバス(目標・内容・評価),学生の活動(事前学修・事後学修・グループ編成と共同学修・プレゼンテーション

資料の作成と発表・試験問題の作問・ルーブリック評価表の作成と活用・学内外でのAL活動など)および成果物(学修内容の板書・複写式リフレクションシートの記述・プレゼンテーション資料・AL活動計画と報告・グループKJ法図解・授業内試験及び期末試験結果・レポート・授業アンケートなど)を対象として、研究目的に沿ったパルス討論を繰り返した。

- (2)パルス討論で浮上した内容をKJラベル(108枚)に転記し,机上に広げて全体感を重視しながら吟味した。
- (3)探検ネットによる本質追及を行った。
- (4)2度の多段ピックアップ(抽出:以下同様)によって焦点化し,30枚の元ラベルを確定した。
- (5)狭義のKJ法によるグループ編成を行った結果,最終的な表札とシンボルマークを付与した8個の島に統合された。
- (6)各島を研究目的に沿って配置して関係線で結び,KJ法全体図解を作成した。
- (7)全体図解をもとに叙述化と考察を行い,ポスター発表を行った(岡・三並,2019)。
- (8)ポスター発表で用いたKJ法全体図解と筆者らのこれまでの原著(岡ら,2010c,2011a,2015b,2016a,2016b,2016c,2016e,2017,2018)を統合して,当事者である学生の視点から改めて検討と総括を行い,パルス討論を繰り返した。
- (9)パルス討論で浮上した内容を103枚のKJラベルに転記し,机上に広げて全体感を重視しながら吟味した。
- (10)探検ネットによる本質追及を行った。
- (11)3度の多段ピックアップによって焦点化し,28枚の元ラベルを確定した。
- (12)狭義のKJ法によるグループ編成を行った結果,最終的な表札とシンボルマークを付与した3個の島に統合された。

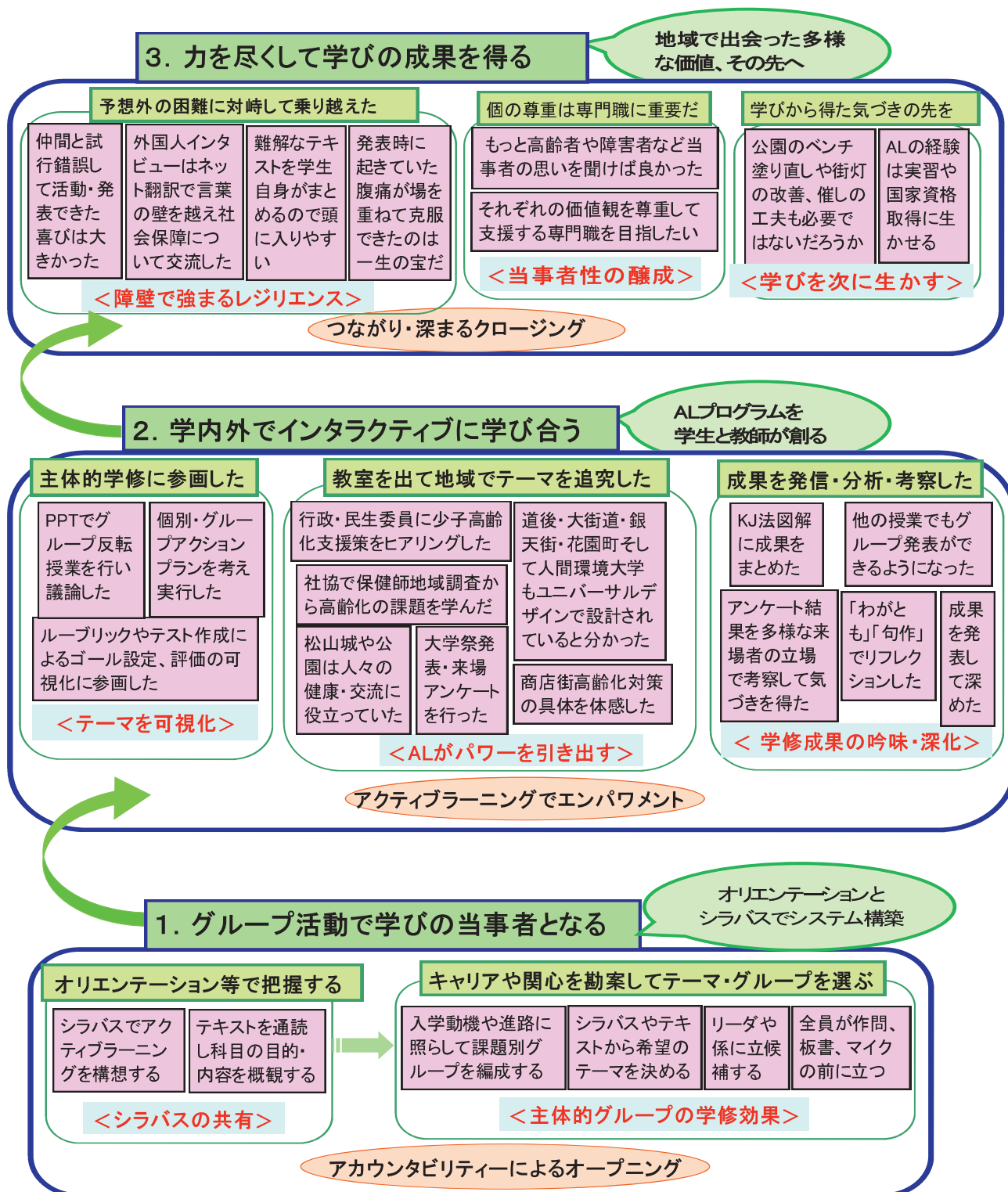
2. 研究倫理の遵守

学生に研究概要と匿名性確保等を説明して同意を得るとともに,個人情報保護に留意するなど研究倫理を遵守した。

III. 結果

KJ法の結果,全体図解(図1)が完成した。以下に叙述化と考察を行う。

⁵ 筆者2名はともに,川喜田晶子氏主宰の「KJ法研修プログラム」を受講済みである。実施に際しては川喜田(1986)の理念を踏襲しつつも,「A4用紙上でグループ編成して配置を考えながら全体図解を作成し,研究発表はPublisherやPowerPointを活用する」など,汎用化の工夫を重ねている。掲載したKJ法図解は,元ラベル28枚からのグループ編成によって「表札」と呼ばれる概念に統合され「島」と呼ばれる象徴的な概念が付与される。さらに関係線によって,混同としたデータ群が明晰に構造化され本質把握へと創造的に導かれる。本稿では元ラベルを「」,第1から3段階の表札を<>,シンボルマークを【】,最終的な島の表札を<>,シンボルマークを『』等で表現した。



1) 2019.9.19 2) 花園町 3) 保健・医療・福祉専門職を志す学生がALで獲得するレリバンス 4) 岡多枝子・三並めぐる
 図1「保健・医療・福祉専門職を志す学生が獲得するレリバンス」

1. オリエンテーションとシラバスでシステム構築

1) 【シラバスの共有】

学生たちは、オリエンテーションまたは授業に先立つ事前学習において「シラバスでアクティブラーニングを構想する」ことや、「テキストを通読し科目の目的・内容を概観する」など、科目の概要を＜オリエンテーション等で把

握する＞段階を踏んで授業に取り組んでいた。

2) 【主体的グループの学修効果】

その上で学生たちは、「入学動機や進路に照らして課題別グループを編成する」、「シラバスやテキストから希望のテーマを決める」、「リーダーや係に立候補する」、「全員が作問、板書、マイクの前に立つ」など、＜キャリアや関心

を勘案してテーマ・グループを選ぶことで、他人任せにできない舞台に立っていた。

3) 第1の島の表札

以上の統合の結果、学生たちは、説明と同意に基づくシステム化された授業によって《グループ活動で学びの当事者となる》姿が浮上した。



写真1 「グループ発表に他の学生や教師が質問」

2. ALプログラムを学生と教師が創る

1) 【テーマを可視化】

学生たちは、「PPT (Microsoft PowerPoint: 以下、PPTと略) でグループ反転授業を行い議論した」、「個別・グループアクションプランを考え実行した」、「ループリックやテスト作成によるゴール設定、評価の可視化に参画した」など、＜主体的学修に参画した＞姿が浮上した。

2) 【ALがパワーを引き出す】

学生たちは、「行政・民生委員に少子高齢化支援策をヒアリング（聴取）した」、「社協で保健師地域調査から高齢化の課題を学んだ」、「松山城や公園は人々の健康・交流に役立っていた」、「大学祭発表・来場アンケートを行った」、「道後・大街道・銀天街・花園町そして人間環境大学もユニバーサルデザインで設計されていると分かった」、「商店街高齢化対策の具体を体感した」など、＜教室を出て地域でテーマを追究した＞活動を行っていた。

3) 【学修成果の吟味・深化】

学外から戻った学生たちは、「KJ法図解に成果をまとめた」、「アンケート結果を多様な来場者の立場で考察して気づきを得た」、「他の授業でもグループ発表ができるようになった」、「『わがとも』『句作』でリフレクション（振り返り）した」、「成果を発表して深めた」など、＜成果を発信・分析・考察した＞ことでエンパワメントの相互作用が示された。

4) 第2の島の表札

以上の統合の結果、学生たちは、ALを通して《学内外でインタラクティブに（相互に影響しながら）学び合う》姿がみられた。



写真2 「オフィスアワーに研究室でAL企画」

3. 地域で出会った多様な価値、その先へ

1) 【障壁で強まるレジリエンス】

学内外でのALの総括として、「仲間と試行錯誤して活動・発表できた喜びは大きかった」、「外国人インタビューはネット翻訳で言葉の壁を越え社会保障について交流した」、「難解なテキストを学生自身がまとめるので頭に入りやすい」、「発表時に起きていた腹痛が場を重ねて克服できたのは一生の宝だ」など、学生たちは、＜予想外の困難に対峙して乗り越えた＞と振り返っていた。

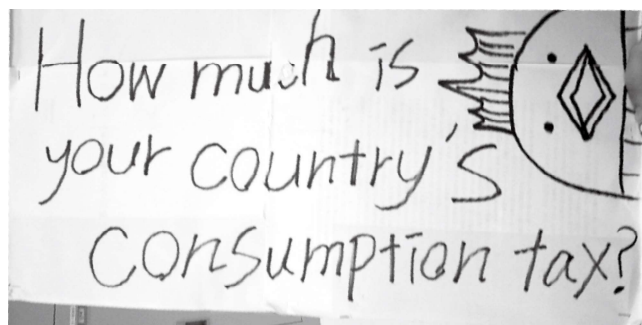


写真3 「手作りのインタビューシート」

2) 【当事者性の醸成】

さらに学生たちからは、保健・医療・福祉専門職を志す立場から、「もっと高齢者や障害者など当事者の思いを聞けば良かった」、「それぞれの価値観を尊重して支援する専門職を目指したい」など、＜個の尊重は専門職に重要だ＞との声が聞かれた。

3) 【学びを次に生かす】

同時に、学生たちはALで得た経験を振り返る中で、「公園のベンチ塗り直しや街灯の改善、催しの工夫も必要ではないだろうか」との提言や、「ALの経験は実習や国家資格取得に生かせる」など、今後の授業やキャリアに向けて＜学びから得た気づきの先を＞見通す姿が浮上した。

4) 第3の島の表札

以上の統合の結果、学生たちはALで多くの困難や障壁に直面しながら《力を尽くして学びの成果を得る》ことができていた。



写真4 「外国人観光客に社会保障のインタビュー」

IV. 結論・課題

1. 研究の結論

保健・医療・福祉専門職を志す学生がアクティブラーニングで獲得するレリバンスに関する実証研究を総括した。その結果、①オリエンテーションとシラバスでシステム構築された『アカウンタビリティによるオープニング』、②ALプログラムを学生と教師が創ることによる『アクティブラーニングでエンパワメント』、③地域で出会った多様な価値、その先へ『つながり・深まるクロージング』がレリバンスに寄与していた。

2. 今後の課題

ALを導入したこれらの授業実践および実証研究には、学会活動や授業改善に向けた教職員のFD・SD研修・実践交流の成果が寄与しており、教育と研究の相互作用の重要性が示唆された。実証研究を通じたプログラム開発と評価の構造化、ティーチングポートフォリオを用いた授業改善の継続、ワークショップ型研修会を開催して研究成果の発信と汎用化を進めることが今後の課題である。

【謝辞】

本研究は筆者1がJSPS科研費JP17K04276の助成を受けた事業です。アクティブラーニングを導入した科目受講生から多くを学ばせていただきました。日本福祉大学学長補佐原田正樹先生に連携研究者としてご助力をいただきました。また、全国福祉高等学校長会理事長高橋福太郎先生、文部科学省視学官矢幅清司先生はじめ関係者の皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。

文 献

- Bonwell,C. and Eison,A. (1998) Active Learning : Creating excitement in the classroom. ASHERIC Higher Education.
- 蓮見音彦, 似田貝香門, 矢澤澄子編 (1997) 現代都市と地域形成 : 転換期とその社会形態. 東京大学出版会.
- 川喜田二郎 (1986) KJ法 - 渾沌をして語らしめる. 東京 : 中央公論新社.
- 厚生労働省社会保障審議会 (2013) 地域包括ケアシステムの構築に向けて.
- 松下佳代, 京都大学高等教育研究開発推進センター編著 (2015) ディープ・アクティブラーニング - 大学授業を深化させるために -. 東京 : 勁草書房.
- 三並めぐる, 岡多枝子, 向井康雄 (2010) 高校生の「健康観」形成と社会的背景 - 健康標語の分析を通して. 教育保健研究 Journal of Health Education Research, 16, 91-100.
- 溝上慎一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東京 : 東信堂.
- 岡多枝子 (2006) ホームレスと高校福祉教育 Incorporating the Issue of Homelessness in Socio education and Service Learning Programs at a High School A Case Study of Field Experience Program. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 11, 84-101.
- 岡多枝子 (2008) 「総合演習 I」報告集 - 地域に学び仲間と創る 岡多枝子ゼミ24名. 日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科 学問への道.
- 岡多枝子 (2010a) 高校時代の進路選択から見た高大接続福祉教育 High School Students' Career Choice and Connection between High School and University in the field of "Social Welfare". 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 16, 94-103.
- 岡多枝子 (2010b) 福祉系高校生及び大学生のキャリア形成. 日本福祉大学社会福祉論集, 123, 127-139.
- 岡多枝子 (2010c) 大学における社会福祉教育としてのサービスラーニング. ふくしと教育, 7, 40-45.
- 岡多枝子 (2010d) 日本における高校福祉教育と福祉社会の構築 - 専門としての社会福祉教育と教養としての社会福祉教育 -. 中日社会保障学術交流会招待講演 (中国福建省杭州浙江大学).
- 岡多枝子・水谷早人 (2010e) 「教職協働」による初年次ゼミナール実践. 大学行政管理学会誌, 14, 133-141.
- 岡多枝子 (2011a) 日本における福祉系高校のレリバンス. アジア太平洋ソーシャルワーク国際会議座長及び発表.
- 岡多枝子 (2011b) これからの福祉を担う人間性豊かな人材を育てるために. 全国福祉高等学校長会第17回総会・研究協議会並びに福祉担当教員等研究協議会 (東京大会) 講演.
- 岡多枝子 (2011c) 社会福祉系大学生の体験的学びとキャリア形成 - 「つながる力」へのアプローチを目指して. 現代と文化, 122, 61-74.
- 岡多枝子 (2014) <テキスト> Welfare - 福祉 -. 愛知 : 名鉄局印刷株式会社.
- 岡多枝子・片山善博・三並めぐる (2015a) 「ふくし」教育における「HBV感染者理解」の学習効果 Learning Effect of "Understanding Hepatitis B Virus Patients" at "Fukushi" Education Setting. 日本福祉大学全学教育センター研究紀要, 3, 1

-10.

- 岡多枝子 (2015b) 青年期に福祉を学ぶ—福祉系高校の職業的及び教育的レリバンス—. 東京: 学文社.
- 岡多枝子 (2015c) 笑顔があふれる「ふくし」社会とは?—愛知県立一宮北高等学校との高大連携—. 日本福祉大学教職課程研究論集・教職課程年報, 13, 61-66.
- 岡多枝子 (2016a) 青年期に「ふくし・ケア」を学ぶ—福祉系高大連携によるアクティブラーニング—Learn “Fukushi care” in adolescence Active Learning by the welfare system high school and University cooperation. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 27, 94-103.
- 岡多枝子 (2016b) 高大接続福祉教育におけるアクティブラーニング—新たな課題 (地域包括ケア・IPE・健康被害)—. 龍谷教職ジャーナル, 3, 32-45.
- 岡多枝子 (2016c) 知多半島の「自然・暮らし・文化」—アクティブラーニングの試み—. 知多半島の歴史と現在, 20, 35-45.
- 岡多枝子, 大浦明美, 奥山留美子 (2016d) 青年期における福祉の学び—高大連携—. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 27, 6-12.

- 岡多枝子 (2016e) 青年期に「ふくし・ケア」を学ぶ—福祉系高大連携によるアクティブラーニング (特集 今, 改めて高大連携を問う 福祉教育の理念と実践). 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 27, 13-20.
- 岡多枝子 (2017) 福祉教育とアクティブラーニング—高大連携研究への誘い—. 全国福祉高等学校長会第23回総会・研究協議会並びに福祉担当教員等研究協議会 (青森大会) 講演.
- 岡多枝子・眞鍋瑞穂・三並めぐる (2018) 看護学生に対する福祉・社会学教育のレリバンス—アクティブラーニングによる実証研究—. 龍谷教職ジャーナル, 5, 18-32.
- 岡多枝子・三並めぐる (2019) アクティブラーニングによる保健・医療・福祉教育のレリバンス, SPOD Shikoku Professional and Organizational Development Network in Higher Education フォーラム2019大学教育の組織力.
- 中央教育審議会 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ— (答申) 9.

【付記】本研究に利益相反は存在しない.

Abstract: *Active learning in health/relevance/medical/welfare/education training.* Journal of Nursing Science in Human Life, 2:1-6 (2019). Taeko Oka¹⁾ and Meguru Minami²⁾ (Community Nursing Laboratory¹⁾ and Pediatric Nursing Laboratory²⁾, Faculty of Nursing Sciences at Matsuyama Campus, University of Human Environments).

Keywords: active learning, relevance, education training